

## II 各教科の正答率、問題の内容及び所見・解説

### 1 国語

#### (1) 正答率

問 題	配 点	正 答		一部正答		誤 答		無 答		通 過 率 率 = $\frac{\text{得点計}}{\text{人数} \times \text{配点}}$ (%)	
		数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)	数	率 (%)		
1	問 1	4	239	50.2	0	0.0	237	49.8	0	0.0	50.2
	問 2	6	214	45.0	202	42.4	39	8.2	21	4.4	69.4
	問 3	4	90	18.9	0	0.0	341	71.6	45	9.5	18.9
	問 4	6	182	38.2	85	17.9	103	21.6	106	22.3	47.7
	問 5	5	414	87.0	0	0.0	60	12.6	2	0.4	87.0
2	問 1 (1)	2	372	78.2	0	0.0	86	18.1	18	3.8	78.2
	問 1 (2)	2	421	88.4	0	0.0	41	8.6	14	2.9	88.4
	問 1 (3)	2	424	89.1	0	0.0	30	6.3	22	4.6	89.1
	問 1 (4)	2	241	50.6	0	0.0	189	39.7	46	9.7	50.6
	問 1 (5)	2	160	33.6	0	0.0	146	30.7	170	35.7	33.6
	問 2	3	268	56.3	0	0.0	207	43.5	1	0.2	56.3
	問 3	3	174	36.6	4	0.8	290	60.9	8	1.7	37.0
	問 4	3	232	48.7	0	0.0	243	51.1	1	0.2	48.7
3	問 1	4	320	67.2	1	0.2	154	32.4	1	0.2	67.4
	問 2	4	175	36.8	1	0.2	276	58.0	24	5.0	36.9
	問 3	6	49	10.3	206	43.3	140	29.4	81	17.0	31.2
	問 4	6	16	3.4	28	5.9	179	37.6	253	53.2	6.4
	問 5	5	228	47.9	0	0.0	225	47.3	23	4.8	47.9
4	問 1	3	189	39.7	155	32.6	119	25.0	13	2.7	57.6
	問 2	3	243	51.1	9	1.9	203	42.6	21	4.4	52.3
	問 3	3	185	38.9	59	12.4	146	30.7	86	18.1	46.5
	問 4	3	212	44.5	0	0.0	156	32.8	108	22.7	44.5
5	16	39	8.2	428	89.9	7	1.5	2	0.4	68.9	

(小数点第2位以下を四捨五入しているため、%の合計が100にならない場合がある。)

#### (2) 問題の内容

- ① 出典は武田綾乃著『白線と一步』である。問題文として使用した箇所は、過去の失敗から自信を喪失し、他者の目を過度に意識して、自分の「本音」を伝えられなくなった高校三年生の知咲が、「自分を変えたい」という思いをもって放送部に入部した唯奈との関わりをとおして、自分自身の今を振り返るまでを描いている。知咲や唯奈の「自分の気持ちを伝えたい」という思いは、思春期にある多くの受験生にとって共感しやすく、登場人物に自身を重ねることで、その複雑な心情を理解し、自分の気持ちや考えを適切に表現することの大切さに気がつくことができる。
- ② 漢字の読み書き、「ない」の品詞、熟語の構成、補助の関係、慣用句や四字熟語についての理解を問う問題である。
- ③ 出典は石井洋二郎／藤垣裕子著『大人になるためのリベラルアーツ』である。本書は「簡単に答えの出ない問題と格闘し、異なる専門や価値観を持つ他者との対話をとおして、真の『大人』になるための思考力を鍛える」ことを目的にした12題からなる思考演習集であり、各題は「問題提起」「論点」「議論の記録」「議論を振り返って」で構成されている。問題文として使用した箇所は、「第4回 芸術作品に客観的価値はあるか」の「問題提起」部分である。芸術作品の価格とその「価値」のギャップの指摘から、P・ブルデューの議論に基づいた芸術作品の価値創造のサイクル、文学作品の価値決定の流れなどに言及した後に、芸術の価値を含めた「客観性」とは何か、という議論へ発展する。「誰にとっても価値がある」とされる芸術作品や文学作品の価値を改めて問い直し、「客観的」であるとはどういうことかを考えることは、日常生活のなかで「当たり前」

として処置しがちな事案に新たな光をあて、思考することにつながるができる。

4 出典は『御伽草子集』の「二十四孝」である。『御伽草子集』は、室町時代を中心とした空想的・教訓的・童話的な短編小説の総称で、問題文として使用した箇所は、親孝行の効験を描いている。天下が大いに乱れ飢餓が広がっている古代中国、蔡順さいじゆんは、桑の実を熟した実とそうでない実に分けて集めていたが、通りかかった賊たちにその理由を問われ、熟した方を母に食べさせるためだと答える。この答えは非道な賊たちの心を動かし、賊たちは米二斗と牛の足の肉を置いていく。蔡順はこれを母に与え、自分でも食べたが、不思議なことに一生涯なくなることはなかったという内容である。

5 このグラフは、総務省情報通信政策研究所『平成27年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 報告書』（平成28年8月）の「いち早く世の中のできごとや動きを知る」「世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得る」の項目と「いち早く世の中のできごとや動きを知る」「世の中のできごとや動きについて信頼できる情報を得る」の項目をもとに作成された棒グラフである。資料から読み取ったことをもとに、「メディアの利用」についての自分の考えが相手に効果的に伝わるよう、自己の体験をふまえ、展開を工夫して書く力をみる問題である。

### (3) 所見・解説

1 文学的な文章を理解する力をみようとした問題である。

問1 場面の展開や登場人物の描写に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。

文章中の「薄っぺらな文庫本」とは、朗読部門の指定図書であり、高校一年生の時の失敗から舞台に立てなくなった「私」にとって、Nコン参加への「捨てきれない未練と執着」の象徴である。「揺れるつり革」は「私は何をしたいんだろう。」の一文を受け、「私」の迷いや揺れる心情を表現している。この読み取りに即した適切な選択肢Aを選ぶ。

問2 登場人物の言動の意味を的確にとらえ、適切に表現する力をみる問題である。誤答としては、

「優しい人間を装う」「人とぶつかり合うことを避ける」といった、「私」に対する具体的な内容を欠いたもの、「優しい人間だと評する」といった他者の評価を含んだものが多かった。「私」が他人から「優しい」と言われることを、自分自身でどのように考えているかを文章中の描写から読み取り、指示された文脈と字数で適切に表現することが必要である。

問3 表現上の工夫に注意して読み、内容を的確にとらえる力をみる問題である。誤答としては、

「一瞬だけ」、「新品同様の」が多かった。正答を導くためには、「嬉しそう」の具体的な描写を読み取り、連続する二文をとらえる力が求められる。唯奈の「嬉しさ」について、比喩を用いて表現している部分を探すと、「知咲先輩にそう言ってもらえてすごく嬉しくて。」という唯奈の発言があり、その直後二文が答えとなる。その他にも比喩表現が用いられているが、「唯奈の嬉しさ」を適切に表現しているのは正答箇所「私の名前を」のみである。

問4 登場人物の心情を読み取り、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。誤答としては、「私には本音を伝える」「自分の気持ちを伝えるのは苦手」といった、具体的な内容を欠いたもの、唯奈の変化に関して説明不足なものが多かった。

文章中における「本音」「苦手」は、次のように描かれている。

(1)「私」は、指定図書の中から「少女たちが互いに本音をぶつけ合う」シーンを選んでおり、唯奈も同じシーンを朗読している。

(2)「他人に本音を見せるのが恐ろしくて……めいっぱい希釈した言葉しか私は相手に伝えられない。」

(3)「私、昔から自分の気持ちを伝えるのが、その、苦手で。」

ここから、「私」と唯奈は、「本音」(＝自分の気持ち)を伝えたくても伝えられない悩みを共有していたが、唯奈は「私」との交流を通じて、「しかしはっきりした声で私に告げる。」

「熱っぽく語る唯奈に、……彼女は真面目な顔でその言葉を否定した。」「ストレートな感情をぶつけられ(傍線部④)と描写され、「私」に対して「本音」(＝自分の気持ち)をはっきり伝えられるようになっていくことが読み取れる。この唯奈の変化を、「本音」「苦手」の二つの言葉を使って、指示された文脈と字数で表現する。

問5 場面や登場人物の設定の仕方をとらえ、内容を的確に理解する力をみる問題である。「足を踏み出せなかった」という表現がもつ多義的な意味に着目する。この「踏み出せない」は、点滅する歩行者用の信号機に対して足を止めることの描写であるが、同時に「Nコン出場を決断

できない」「本音を伝えられない」現実から「踏み出せない」でいる「私」の心情を表現したものである。「私」の心情を情景描写と重ね合わせながら読み取り、最も適切な選択肢を選ぶ。文章中「自分の気持ちを伝えられるようになりたい」と願っていた唯奈は、次のように表現されている。

(1)「唯奈の背筋はぴんと真っ直ぐに伸びていて……唇から覗く白い歯がなんだかまぶしくて、私は思わず目を伏せた。」

一方の「私」は、この唯奈の輝かしさとは対照的に、次のように表現されている。

(2)「——二年前のあの日から、私はずっと現実から逃げ続けている。」

(3)「他人に本音を見せるのが恐ろしくて……相手に伝えられない。」

(4)「鞆がやけに重い。吹き抜ける風は生ぬるく、私をひどく不快にさせた。」

二人の対照的な心情描写は、信号機と「白線」が暗示する、次の情景描写に繋がっている。

(5)「思わず足を止めた私とは対照的に、唯奈はぱつと駆けだした。引かれた白線を軽やかに踏み、彼女はそのまま向こう側へと渡り終えた。」

これらから、「足を踏み出せなかった」とは、変わりたい自分に向かって第一歩を踏み出していく唯奈とは対照的に、今の自分から抜け出せずにいる「私」の様子を、「白線」における二人の情景描写を踏まえて表現した適切な選択肢**ウ**を選ぶ。

## 2 基礎的・基本的な言語能力をみようとした問題である。

問1 基本的な漢字の読み書きについての問題である。(1)「輪郭」は、様々な誤答がみられたが「ろんり」「わこう」「わりん」などのように似た語形と読み誤るものがみられた。(4)「簡潔」は、「簡結」「簡決」のように一部の誤りや「完結」など例文の意味の取り違えの誤答がみられた。日常での漢字学習の際に、語彙として意味を理解するとともに、同音語や同訓語は文脈の中において、適切な漢字を判断しながら使用する必要がある。

問2 助動詞「ない」と他の品詞分類についての理解を問う問題で、正答は**エ**である。誤答としては、**イ**「形容詞」を選んだものが最も多かった。品詞の特徴やはたらきを理解するとともに、例文や文章中の使用例も活用しながら学んでいく必要がある。

問3 熟語の構成についての理解を問う問題である。似た意味の漢字で構成されたものを全て選ぶ問いで、正答は**ウ**「種類」と**カ**「詳細」である。誤答としては、**ア**「国立」と**エ**「駅前」という主述の関係や修飾・被修飾の関係の熟語を選んだものが多かった。熟語の意味を理解したうえで、語順や主述、修飾などの文法的な構成に着目する学習が求められる。

問4 文節の関係についての理解を問う問題で、正答は**ウ**である。誤答として、**エ**「修飾・被修飾の関係」が最も多く、「補助の関係」を理解していないことが理由として挙げられる。複数の例文を参照しながら、文節の関係を具体的かつ反復して学習する必要がある。

問5 慣用句、四字熟語についての理解を問う問題で、正答は**イ**「口がこえる」である。誤答として多かったのは、**ウ**「口にあう」であり、「食べ物に関する」というところまでは理解したが、正答との意味の違いや用法まで理解していないことが理由として挙げられる。身体に関する慣用句の理解に加え、他の熟語などとの関連を紹介しながら、これらの語句や表現を広げていく必要がある。

## 3 説明的な文章を理解する力をみようとした問題である。

問1 文章に書かれている内容を的確に読み取り、理解する力をみる問題である。空欄と同じ形式段落の中に「ではその絵に本当にそれだけの「価値」があるのかとあらためて問われると、言葉に詰まってしまう人が多いのではなかろうか。」という一文があり、これに続く空欄を含む文では、その理論を論理的に説明する内容となる。このとき、「言葉に詰まってしまう人が多い」のは、絵画作品の「価値」と「価格」が等しい(釣り合う)と言い切ることができないからである。そのような論理展開になる選択肢は**エ**である。論理展開を正しく読み取るとともに、二重否定などの表現方法についても理解する必要がある。

問2 文章全体と部分との関係、例示の効果を考え、内容を的確にとらえる力をみる問題である。傍線部①の「彼らの作品」とは、ここではゴッホやムンクなどの有名画家の作品ということである。これらの作品が、絵画のもたらす感動以上の価値を有し、その価格が高騰していくプロセスを、ゴッホの例を用いて具体的に説明した部分を探し、その形式段落の最初の五字「絵画について」を書き抜けばよい。抽象的な表現とそれに対応する具体的な表現がどこなのかを丁寧

に確認しながら、解答箇所を探す力が必要である。

問3 文章の構成や展開に注意して内容を理解し、適切に表現する力をみる問題である。芸術作品と文学作品の価値と価格の関係について述べた部分に着目し、その内容を理解する。空欄アについては、文章中に「価値」ではなく「価格」であれば、いわゆる市場原理、すなわち需要と供給の関係によって決まると考えられる。絵画作品のオリジナルは一枚しか存在しないので、それに対する需要が大きければ大きいほど値はつり上がる。」とあるので、ここをふまえて解答する。空欄イについては、「たとえばダンテの『神曲』は価値ある作品として長く受け継がれているが、刊行されている書籍自体の値段は一般の書物と変わらない。つまり文学作品については価値と価格の対応関係がほとんど存在しないので」とあり、文学作品では、作品の価値が価格の変化に与える影響が少ないことが述べられている。この内容に合致する言葉を探すと、「そして彼らの作品は、しばしば「不滅の古典」「永遠の名作」といった言葉で聖別され、不変の価値をもつものとして継承されていく。」とあるので、ここが正答となる。文章を問題の指示に合うように再構成し、記述する力をつけていく必要がある。

問4 表現上の工夫に注意して内容を理解し、条件に応じて適切に表現する力をみる問題である。傍線部③から、「生産の場」によって社会的に形成された一種の神話」とは、「ブルデュー言うところの「信仰」の言い換えであることを読み取り、ブルデューの議論にある「信仰」の内容について着目する。すると、「信仰の圏域としての生産の場」とは要するに、作品の作り手が組み込まれている人間関係や社会制度の総体のことである。……芸術家が「創造的な力」に恵まれた特殊な存在であるという共通に認識（客観的な根拠をもたないがゆえに、ブルデューはこれを「信仰」と呼んでいる）が形成され、その作品が一種の「フェティッシュ」（無条件の崇拜対象）として価値を付与されるというのである。」とあり、同様の説明で、「ゴッホはそれだけの評価に値する偉大な芸術家であるという共通理解（信仰）が、一般観衆のあいだに形作られていく。」とある。これらの記述から、「ブルデュー言うところの「信仰」について、指示された文脈と条件に従って説明する。傍線部の内容を理解し、別の箇所にある同内容の表現を探して、与えられた条件に合うように書く力が求められる。

問5 文章の論理の展開や表現の仕方をとらえ、内容を的確に理解する力をみる問題である。文章中で筆者は、「主観的」と対比されている言葉は「客観的」であり、「客観的な価値」の定義を付与することはできないと述べている。さらに、「誰にとっても等しく同じ価値を有する」こと（＝「客観的な価値」）が芸術作品の本質である、という記述は文章中になく、むしろ、そうした作品など「存在しない」と述べている。よって、イの選択肢は筆者の論の展開や表現の仕方について述べた文として不適切である。文章全体を叙述に即して読み取り、要旨をとらえる力が求められる。

4 古典を理解する基本的な力をみようとした問題である。

問1 場面や登場人物の描写に注意して読み、内容を理解する力をみる問題である。A「拾ひけるが」の主語は、その後の「何とて二色に拾ひ分けけるぞ。」という発言に答えていることから、ア「蔡順」である。B「去りけり」の主語は、蔡順の孝行を感じて米と牛の足を置いていった「心強き不道の者」と表現される者たち、つまりエ「人を殺し、剥ぎ取りなどする者ども」である。C「食すれども」の主語は、直前に「みづからも」とあることから、母とともに米と牛の足を食べたア「蔡順」である。文章の展開に即し、場面を確認しながら読んでいく力をつける必要がある。

問2 歴史的仮名遣いについての理解をみる問題で、正答は「とうようは」である。文語のきまりを正確に理解するとともに、古文を音読し、古典特有のリズムを味わいながら古典の世界に触れる学習活動を行っていくことが大切である。

問3 古典に表れたものの見方や考え方をとらえ、内容を理解する力をみる問題である。古文で示されている「孝行」の具体的な内容に着目する。

(1)「食事に乏しければ、母のために、桑の実を……、熟したると熟せざるとを分けたり。」

(2)「一人の母を持てるが、この熟したるは、母に与へ、いまだ熟せざるは、わがためなり。」

これらから、蔡順は食事に困窮する中、母親に熟した実を与え、自分は熟していない実を食べようとしたことが「孝行」の内容である。

問4 文章に書かれている内容を、叙述に基づいて的確にとらえる力をみる問題である。漢詩に用いられている「赤眉知孝順」を口語訳すると「人を殺し、剥ぎ取りなどする者ども（＝赤眉）」

が、(蔡順が) 孝行で恭順なことを知って」となる。この内容が古文で示されているのは、「心強き不道の者なれども、かれが孝を感じて」(20字)の箇所である。この最初の五字を書き抜く。誤答としては、文脈から内容を正しく読み取れなかったことに起因するものが多かった。文章の展開に即し、丁寧に読んでいく力をつける必要がある。

- 5 資料から読み取ったことをもとに、「メディアの利用」についての自分の考えを、段落や構成に注意しながら、自らの体験をふまえて書く力をみようとした問題である。資料は「平成27年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査 報告書」(平成27年調査) (総務省)より作成したものである。

作文を書く際は、まず、自分のものの見方や考え方を整理するために、作文の構成メモを書く。構成メモなどをつくることで、文章の柱がぶれなくなったり、見直しや推敲がしやすくなったりする。次に、(注意)に従いながら、記述に入る。字数が限られているので、同じ内容や言葉が重複しないようにする。自分の考えや意見を述べるときには、自分の立場を明確にして、論理の筋道が通るように記述する。筋道を立てて書くと、自分の考えや意見を相手に説得力をもって伝えることができる。具体的には、次の点に留意する。

- (1)自分の考えや意見、判断の根拠(理由)を明確にする。
- (2)根拠(理由)は、客観性や信頼性の高いものを選ぶ。
- (3)最初から最後まで、自分の立場がぶれない(自分の意見が揺れない)ようにする。
- (4)資料(グラフなど)からの情報、本の内容や他から聞いた言葉などを含む場合は、適切に引用する。
- (5)論理の展開を工夫し、順序立ててわかりやすく説明する。

誤答としては、示された資料から読み取ったことを作文の中に書いていないもの、資料の読み取り方を誤ってしまったものが多かった。加えて、誤字・脱字等の表記に誤りのあるもの、主語・述語の関係が不適切なもの、話し言葉で記述しているもの、原稿用紙の使い方が不適切なものなどがみられた。自分の意見や考えを相手により明確に伝えるために、資料から情報を正確に読み取り、自分の考えの根拠を示して、文章を書く習慣の定着が求められる。